

温泉保養地と女性 —モーパッサン『モントリオル』—

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

Land of the Spas and Women —Maupassant's *Mont-Oriol*—

Eri OHASHI

Center for Language Studies, Nagasaki University

Abstract

Maupassant's novel *Mont-Oriol* published in 1887 depicts the situation of the Spas in the 19th century. One theme of this novel is the romance between Christiane, a married and aristocratic woman and of Paul, a rich and single man. This paper analyzes the relationship between the women and the land of the spas. Paul abandons Christiane who is pregnant with Paul's child. However Christiane feels the sense of unity with the land where the natural hot water springs, in other words, the new resort place, which was traditionally used as a vineyard. Even the men who belonged to the old society, Gontran, Christiane's brother, and Paul engage with the farmer's daughters who were born and grew up in the land of a new Spa named Mont-Oriol. *Mont-Oriol* describes the change from the farmland which had continued until the 18th century into the space of a modern concept, hot spring resort, and the beginning of the new world created by the people of all classes who are involved in this place.

Key words: *Mont-Oriol*, Maupassant, Spa, Women, 19th century

はじめに

温泉は、様々な国において古代から病を癒すという効果で知られていた。フランス革命以前は王侯貴族達が温泉療養をしていたが、革命直後は貴族階級の激減によりほとんどの温泉地は衰退していった。その後 19 世紀の半ばになるとブルジョワ階級の台頭、鉄道網の発達、相次ぐガイドブックの出版、ホテルやカジノの充実、バカンスの普及等の要因によって、温泉保養地は飛躍的に発展していく¹。ユーゲン・ウェーバーは、『フランス、世紀末』の中の「温泉療養者と観光客」の章で、温泉地は 19 世紀には海岸にさきがけリゾート地になったと指摘している²。保養地ではブルジョワの治療客を引き付けるために、サロン、遊戯室が作られ観劇やコンサートも開催された。さらに、フローベール、モーパッサン、ミシュレ、マラルメ、ゴンクール兄弟という作家達も療養のために温泉に滞在し、温泉保養地を舞台とした小説も書かれるようになった³。

1887 年に出版されたモーパッサンの『モントリオル』は、当時の温泉保養地の状況を描いた長編である。『モントリオル』のテーマは大きく二つに分けられる。ひとつは人妻クリスティアーナと独身男性ポールとの恋愛であり、もうひとつは彼女の夫アンデルマットと農民オリオル父子との間の温泉事業のための土地の売買の駆け引きである⁴。本論では、とくにクリスティアーナの恋愛を中心に女性と温泉保養地との関係を論じていきたい。

*

成功した事業家のユダヤ人のアンデルマットは、女性を引き付ける容姿ではないが、「あらゆる事柄に精通し、その精通ぶりは実に驚くべき判断の正確さと、洞察力の速やかさと頭の働きのしなやかさ」⁵を持っている人物である。そのような彼が結婚相手として選んだのは、金銭的余裕がない貴族の娘クリスティアーナであった。まず、クリスティアーナがどのような女性として描かれるか見てみよう。アンデルマット夫妻とクリスティアーナの父と兄がオーヴェルニュ地方にあるアンヴァルのボヌフィュー温泉を訪れたのは、彼女の不妊治療のためだった⁶。『モントリオル』では彼女の他に、その地方の豪農オリオル老人の二人の娘が副次的人物として登場する。姉はクリスティアーナの兄ゴントランと婚約、妹はゴントランの友人ポールと婚約することになるのだが、彼女達はクリスティアーナと比較すると二義的な存在であるにもかかわらず、容貌が非常に詳しく描写されている⁷。それに反してクリスティアーナは「ほう、すごい美人がきた」⁸と他の湯治客達に評されはするが、「金髪で小柄の色の青白い美人である」⁹とだけ書かれ、多くの女性に当てはまるような容貌しか示されていない。だが物語の冒頭部分で、彼女は次のように描かれる。ボヌフィュー温泉で開業

している 3 人の医者の中で夫が最も近代的だと考えたラトヌ医師は、彼女を診察して色鉛筆で彼女の湯上り着に内臓の輪郭を描いていく。「この仕事を 15 分続けた後で、夫人の身体は地図そっくりになった。大陸があり、海があり、岬があり、河があり、国々があり、都会がある。そしてこうした地上の区分すべてに名称がついている」¹⁰。このようにクリスティアーヌに関してだけ、外見よりも内臓すなわち身体の内部の方が重視され、しかもそれは地図として描写されるのである。

また他の女性達と異なり、彼女の言動にはある特徴が見られる。それは、この温泉保養地への熱烈な称賛である。

クリスティアーヌは叫んだ。

「まあ、ここに住んだらどんなに幸福でしょう」と、彼女は早くも幸福なような気がした。

人が、[…] 自分の来るのを待っていてくれたように思われる土地に、そのために自分は生まれたのだというような気のする土地に足を踏み入れたとたん、身体にも心にも忍び込み、楽に呼吸させてくれ、身も心も軽くしてくれる幸福感に心中をつらぬかれたのだ。¹¹

クリスティアーヌはパリで生まれ育ち結婚後もパリに住む生粋の都会の女性であり、ボヌフィュー温泉に来たのは初めてである。それにもかかわらず、自分がこの保養地に来るために生まれてきたと感じたということは、この温泉保養地は彼女の再生の場であることを示唆していると考えられる。また、土地が彼女の身体の内部入り込む感覚から彼女は絶対的な「幸福感」に包まれる。それは彼女がアンヴァルの大地に本質的に所属する存在であることを示していると言えよう。

そして彼女が上記のような感情を抱いたのは、次の出来事の直前であった。オリオル老人が自分のブドウ畑のために大きな岩を爆破しようとした時、クリスティアーヌは爆破現場をうろついている子犬が死んでしまうのではないかという恐怖に捉えられる。その時ポールは危険もかえりみずに子犬を救うために飛び出していく。彼の無謀とも言える姿を見て「クリスティアーヌは感動のために息がつまってしまった。躍り上がるようにどきどき打っている心臓の上に両手をあてたまま、すっかり頭が混乱して、思わずこう聞いた。「おけがは、まさか？」¹²。彼が救おうとした子犬は爆破とともに死んでしまうが、彼女はこの瞬間にポールに心を奪われたと考えられる。この土地を訪れる以前には夫に対しても決して経験したことがなかった異性への恋愛感情がはじめて芽生えたのである¹³。

さらに、他の湯治客が温泉の効果に疑問を持ち罵るのに反して、クリスティアーヌは効果よりも湯の中で気泡に包まれることに魅力を感じる。

その中につかっているクリスティーヌはじつにいい気もちだった。じつに軽く、じつにやわらかく、じつによい気持ちに愛撫し、抱きしめてくれる。この動いている湯の波が。生きている波。[…] 休息と安穩、静かな思考、健康、密かな喜びと沈黙の喜び、こういうものから成り立っている静かな幸福感が、この温浴のえもいわれぬ温かみと一緒に彼女の身中に忍びこんだ。¹⁴

彼女にとって湯は生きて躍動している存在である。湯の中に沈んでいる時、彼女を満たすのも圧倒的な幸福感であり、その感覚はまた彼女の身体の上に描かれた地図＝土地とも連鎖していく。大地の内部から湧き出た湯に浸ることによって、土地が自分の内部に入り込むのではなく、今度は反対に彼女が自分の身体全体を大地の内部に融合させ、さらなる一体化を図ることになる。そしてこの湯の中で彼女が夢想するのは、爆破の時に出会ったポールのことであった。「この青年は例の犬の一見以来少々気にかかって困る」¹⁵。この気がかりはポールがクリスティーヌにとって大地や湯に深く関連する人物であることを暗示している。

そして、ポールはといえば、彼もオーベルニュ地方の大地との一体感をクリスティーヌに語る。

僕という人間は全身が開いているような気がするんです。[…] 森全体が僕の眼に入ってくるのです。森が僕をつらぬき、僕の中に侵入し、僕の血の中を流れます。それにまた僕が森を食べているような気がするんです。森が僕の腹の中を満たすのです。僕が森そのものになるのです。¹⁶

ポールとクリスティーヌは大地が身体の中に侵入してくるような感覚を抱くという点では一致している。しかし、ポールの方は土地や自然との接触で幸福感を抱いているわけではない。その自然を食らいつくし自分の所有物にしてしまうのだ。クリスティーヌは彼の言葉を聞いて「自分までが森と同じようにこの大きな食欲な眼に食べられてしまうような気」¹⁷がする。さらに、彼はオーベルニュ地方に漂う匂いを官能的に語り、彼女を魅了する。葡萄やアカシアや草の香りのなかでポールは、ある香りについて含みをもたせた言い方をする。「それにもうひとつ、暑い時に、往来を歩いていて空気中にちょっとヴァニラのような味の漂っているのにお気づきですか？—お気づきでしょう、え？—そうですか、あれは…あれは…いやどうも、これはちょっと言いにくい。[…] そう、家畜小屋の匂いです。牛の全部が街道にこの家畜小屋の匂いをまいて行くのです」¹⁸。甘いヴァニラの香りが家畜小屋の匂いに変貌するという過程は、クリスティーヌが抱いたポールに対する認識の変化と重なりあう。最初に出会った時、ポールを醜い男だと思ったクリスティーヌであったが、しばらくして

彼の匂いに気づく。「彼の略服の上着から、下着から、おそらく肌からも何か微妙な、得も言われない匂いが発散していた」¹⁹。彼女には理解しがたい匂いだったが、彼女はその匂いに魅了されたと考えられる。さらにポールの気質は次のように語られる。

「この男はその熱烈な本能で、どんな時でも動物的な熱烈な本能で田園を愛しているのだ。田園と聞くと興奮せずにはいられない官能型の男として田園を愛しているのである」²⁰。ここで強調されているポールの本能的かつ動物的な欲望は二人がいる大地と連鎖している。ポールの官能を呼び起こす森はクリスティアーヌであり、彼はその森が広がる大地を歩きまわりすべてを食らい尽くしたいという欲求を持つ動物でもあるのだ。

実際ポールは、この土地と結びついていなければ女性に魅力を感じない。彼がクリスティアーヌと別れる予感を強く抱くのは、彼女が夫とともにパリに戻る、すなわち温泉保養地を去る決意をしたからである。彼女の方は、パリに帰っても上手に関係を続けていけるという確信を持っているのだが、ポールは、最後のアンヴァルでの夜の逢引の時に身震いが全身を走るのを感じる。「身内の凍る戦慄だった。[…] 今突如として不幸の前触れのように身内に忍び込んだ」²¹。絶望的な気分になったポールは次のような行為に至る。

彼は、彼女のものなら何一つ失うまいとするかのように、跪いたかと思うと、顔を地面に寄せて黒い影の縁に口をつけた。喉の乾いた犬が泉の縁に腹ばいになって水を飲むように、愛する影の輪郭を順々に追いながら激しく道の埃に接吻しはじめた。そうやって両膝で歩きながら、彼女の方に近づいていった。地面の上にのびているなつかしい黒い影を唇で吸い集めていくかのように、彼女の身体の影絵に愛撫の雨を浴びせながら。²²

ポールはクリスティアーヌが目前にいるにもかかわらず、彼女の身体に触れようとせず、大地にのびる彼女の影に接吻をする。この行為は、彼が魅せられていたのはオーベルニュの大地そのものであり、クリスティアーヌが土地から切り離されると、もはや彼女に魅力を感じなくなるということを示唆している。土地を去っていくクリスティアーヌは、ポールにとって実態のない影、大地に反映された存在でしかないのだ。またポールが犬のような姿で彼女の影に接吻したという記述にも注目したい。クリスティアーヌがポールに最初に魅了されたのは、彼が爆発現場をうろついていた子犬を救おうと駆け出したからであった。そしてこの子犬とポールの間にはある共通点が見いだされる。「髪の毛は黒く、短く、ごわごわしているし、目はあまりにも丸すぎる」²³と書かれるポールの容貌は、彼が救おうとして救えなかった「黒い狆のような」²⁴子犬に類似している。さらにクリスティアーヌが自らの身体が溶解するように

感じ、幸福感に最も導かれたのは温泉と一体感を得たときである。ポールが「喉の乾いた犬が泉の縁に腹ばいになって水を飲むよう」な行為をしたということは、地下から湧き出た温泉に同一化したクリスティアーナを求めたからであるとも考えられるが、温泉保養地を離れてしまう彼女では、ポールが喉を潤すのは不可能となるのだ。

さて、『モントリオール』の第2部は、1年後から始まり前年とほぼ同じ人々が保養地に集う。しかしポールは妊娠したクリスティアーナに対してもはや愛情を感じてはいない。ポールに変わらぬ愛情を抱く彼女は、昨年二人が最後に逢引した場所へもう一度行こうと乗り気でない彼を誘う。その場所に着いたクリスティアーナは1年前地面に映った彼女の影に接吻した行為をポールに思い起こさせようとするが、彼は以下のような態度を取る。

月が、彼女の影を地面に長く落としたと思うと、醜く形の変った脇腹のふくらみをくっきりと描き出した。と、ポールは、自分の足元にありありと女の妊娠を見せつける影をながめながら、女と向き合って、じっと立ちすくんだ。詩の世界にだけ遊ぶ潔癖さが傷つけられた気持ちで、女がそのことを感じていないのが、無性に腹立たしかった。[…] たまりかねたいらだたしさを声の中に含ませながら、こう言った。

— ねえ、クリスティアーナ、そんな子供らしいこと、おかしいじゃないか。²⁵

ポールが彼女の姿を醜いとはっきりと認識し嫌悪感さえ覚えたのは、彼女の身体を直視したからではなく、彼女の影を見たからである。ポールにとってクリスティアーナの真実の姿はあくまで大地を媒介としてしか出現しないのである。

そして彼はその後オリオル老人の2人の娘の妹、シャルロットに魅了される。農民の娘であるにもかかわらず、姉妹は修道院で教育を受け、田舎的な粗野な部分と都会的な洗練された部分が混合された魅力を持ち男性たちを引き付ける。クリスティアーナの兄ゴントランは、アンデルマットの勧めで、新たな温泉保養地を建設するために不可欠な土地を相続する姉のルイーズと金銭のために結婚することを決意する。他方ポールはゴントランが最初に気に入って近づいていたが、相続という理由で姉に乗り換えたことで深く傷ついていたシャルロットに惹かれていく。

ポールを捉えたのはシャルロットの雰囲気であった。

都会で生まれ都会で育った女とまるで違って見えるではないか。誘惑のために準備される女の持つ技巧的なところを少しも持っていない。言葉に少しも物まねしたところがなく、からだのこなしに少しも規則づくめのところがなく、視線に偽りが無い。

新しい純な存在であるというばかりでなく、ある原始的種族から生まれた存在である。まさにこれから都会の女になろうとする瞬間における本当の大地の女である。²⁶

シャルロットへ対する恋愛が芽生えた時のポールの感情は、クリスティアーヌに対して最初に抱いた感情と類似している。「クリスティアーヌの傍にいる時はまるで少女を相手にしているような気がする。それほどこの女を初心だと彼は察していた。子供に対するような許嫁に対するような愛し方だった」²⁷。二人の女性の共通点は、純粹で男性を誘惑する技巧をこらさないことにある。だが、シャルロットは、パリに育ち一時的に不妊治療のためにこの保養地に来ているクリスティアーヌとは根本的に異なっている。小説の題名『モントリオル』は、シャルロットの父であるオリオル老人の土地をアンデルマットが開発して誕生させた新たな温泉保養地の名前である。オリオルという苗字からもわかるように、シャルロットはこの土地に根差した「本当の大地の女」なのだ。アンデルマットは、保養地をモントリオルと名付け、さらにその中にある三つの源泉の名前を「クリスティアーヌ」「ルイズ」「シャルロット」と決定した。クリスティアーヌは名前だけだが、シャルロットの場合は苗字と名前がそろることから、この新たな保養地ではクリスティアーヌは部外者となり、シャルロットが彼女にとってかわり中心的な人物となるであろうことが示唆されている。

それにともない、自分を裏切ってシャルロットと婚約したポールの子を妊娠したクリスティアーヌは絶望し、出産に関する次のような幻想を見る。「腹を立ち割られ、血だらけの寝台の上に仰向けになっている自分の姿が見える。一方人々は、何か赤いものを、動かないもの、泣かないもの、死んでいるものを、向こうに運んでいく。〔…〕おそろしいたまらない受難の光景を改めてまざまざ見るのである」²⁸。幻覚の中で彼女自身の死体が横たわっている血だらけの寝台は、大地から湧き出た「濃いきれいな赤色をしていた」²⁹モントリオルの源泉を想起させる。また「腹を立ち割られた」という表現は、クリスティアーヌが生物に対するような「憐憫を抱いた」³⁰爆薬で割られた岩のイメージと重なり合う。さらに爆発の時に岩の周囲をうろついていた黒い子犬の死後の姿も忘れるわけにはいかないであろう。

足元を見た拍子に、黒い毛でおおわれた、泥まみれの、ねちゃねちゃする、血だらけの肉片を踏んだのだということに気付いた。〔…〕喉がつまった。あまりに激しく喉をつかれたので涙を抑えることができなかった。〔…〕もう何も聞きたくなかった。ただ帰りたい。部屋に閉じこもりたい。あんなに楽しく始まった今日は、彼女〔クリスティアーヌ〕にとって終わりはすっかり嫌な日になってしまった。これは前兆だろうか？³¹

クリスティアーヌが出産間際に見た真っ赤に染まって死んだような子供のイメージは、爆破で死んだ子犬と重なりあう。ポールに似た子犬の死は、ポールの子供の死のイメージに連鎖していく。実際の出産では、子供は無事に生まれクリスティアーヌ自身の健康にも問題はなかったが、彼女はその後ポールに会い次のような態度を取る。「こんなにわずかの時間しかおめにかからなくてすみませんけれど、子供のことにかなければなりませんから」。男は立ち上がった。もう一度彼女の差し出している手に接吻した。それから部屋の外に出ようとする。「ご幸福をお祈りしますわ」と彼女が言った³²。クリスティアーヌのポールへの最後の別れの言葉は、自分を裏切った男性への未練をみずから断ち切り、パリで子供とともに生きる決意を示している。彼女は一体感を感じたこの土地での体験によって精神的に自立した女性へと変貌することができたと言えるだろう。

おわりに

モーパッサンは物語の舞台を、19世紀のブルジョワ階級の社交の中心地であったパリではなく、温泉保養地という場所に設定することにより、従来とは異なった人間関係を描いた。彼の作品で女性が主人公の代表的な長編小説と言えば『女の一生』であるが、この作品の主人公ジャンヌは男性に翻弄され続ける。彼女はコルシカ島へ新婚旅行に行く以外は他の都市へ移動せず、先祖代々の館がある因習的な田舎で一生を終える。それに反して温泉保養地は、階級が異なるだけでなくお互い全く知らない人々が集い、そこでクリスティアーヌは恋愛を初めて体験する。彼女はジャンヌと同様に貴族の娘であり、愛していた男性に裏切られるが、ジャンヌとは異なり、愛した男性なしで子供を育てていく選択をする。それは、クリスティアーヌが温泉が新たに湧きだした大地、それまでのブドウ畑という伝統的な使用とは異なったリゾートという未来に開かれた土地と同一化することによって可能となったと言えるだろう。また新たな役割を担った土地は男性達の生き方も変えていく。旧社会に属するゴントランやポールでさえもモンリオールと名付けられることになった土地で生まれ育ち従来の環境では出会うことがなかった姉妹と結婚することになるのだ。『モンリオール』は、伝統的に固定かつ閉鎖されていた空間が、温泉保養地という新たな概念の空間に変貌し、そこを訪れた人々が創造していく未知の世界の始動を描いていると言える。さらにこの作品には経済問題も深く関係しているが、それについては今後論じていくつもりである。

註

- 1 Voir Philippe Langenieux-Villard, *Les Stations thermales en France*, Presses Universitaires de France, coll. « Que sais-je ? », n° 229, Paris, 1990, pp. 24-25 (成沢広幸訳『フランスの温泉リゾート』、岩波書店、2005年参照)。イザベル・プザドゥはカジノが温泉保養地の発展に大きく貢献したと指摘している (voir Isabelle Pouzadoux, « Pour une gestion du temps libre au cœur de la station thermale: le casio de Vichy de 1870 à 1939 » dans *2000 ans de thermalisme: économie, patrimoine, rites et pratiques : actes du colloque tenu en mars 1994 à Royat (Puy-de-Dôme)*, réunis par Dominique Jarrassé, Publications de l'Institut d'Étude de Massif Central, 1999)。
- 2 Voir Eugen Weber, *Fin de siècle : la France à la fin du XIXe siècle*, traduction de l'anglais par Philippe Delamare, Fayard, 1986. 温泉開発の歴史については成沢広幸「フランス温泉療養リゾート沿革」、『経済学論集』第9巻第1号、宮崎産業経営大学経済会、2000年を参照した。
- 3 Voir *Les stations thermales en France*, op. cit., pp. 38-39. E. -H. ギターはウォルター：スコットが『聖ロナン鉱泉』(Sir Walter Scott, *Saint Ronan's Well*, Nabu Press, 2010)という小説を1823年に書いたのは偶然ではなく、温泉ブームと関連していると述べている (Eugène-Humbert Guitard, *Le Prestigieux passé des eaux minérales: histoire de thermalisme et de l'hydrologie des origins à 1950*, Société d'Histoire de la Pharmacie, Paris, 1951, pp. 66-67)。またネルヴァルがバーデン・バーデンでオペラを鑑賞し、テーヌ、ジョルジュ・サンド、ドストエフスキー、ホフマン等が小説の中に温泉保養地を登場させていることも指摘し、保養地はロマネスクな場所でもあったと分析している (voir *ibid.*, op. cit., pp. 145-165)。アルマン・ワロンもミシュレ、メリメ、フローベール、ゴンクール兄弟、ツルゲーネフ、ヴェルレーヌ、マラルメ、プルーストの温泉保養地滞在、及びヴィシーサンヨール会社の息子で詩人・作家でもあったヴァレリー・ラルボーについて言及している (Armand Wallon, *La vie quotidienne dans les villes d'eaux (1850-1914)*, Hachette, 1981, pp. 278-319. Voir aussi *Villes d'eaux en France*, ouvrage réalisé par l'Institut Français d'Architecture sous la direction de Lise Grenier, Édition Institut Français d'Architecture, 1985, p. 179)。山田氏はベルタル、ジッド、ドーデ、チャーホフの温泉に関する記述に言及している (山田登世子、『リゾート世紀末』、筑摩書房、1998年、176-182頁参照)。
- 4 成沢氏は19世紀後半に起こった温泉事情を分析しながら、『モントリオル』の恋愛を論じている (成沢広幸「モーパッサン『モントリオル』を読む 世紀末温泉

開発ブーム』、『宮崎産業経営大学研究紀要』第13巻第1号2000年参照)。

- 5 Guy de Maupassant, *Romans*, édition établie par Louis Forestier, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1987, p. 488. 『モントリオル』は最初1886年12月23日と1887年2月6日に『ジル・ブラス』紙に掲載された。なお訳出にあたっては、杉捷夫訳『モントリオル(上)(下)』、岩波書店、2005年を参照した。アンデルマットはユダヤ人である。1880年から1914年にかけてユダヤ人たちのサロンがフランス文学に大きな影響を与え、そこにモーパッサンも出入りしていた。ポール・モーランはモーパッサンがアンデルマットをユダヤ人に設定することによって、当時のユダヤ人達の経済面におけるフランス社会での動向を描こうとしたと指摘している (voir Paul Morand, *Vie de Guy de Maupassant*, France Loisirs, Paris, 1993, p. 98)。
- 6 温泉が不妊治療に効果があるということから、カトリーヌ・ド・メディシス、アンヌ・ドートリッシュ、ジョゼフィーヌ・ボーアルネも温泉保養地で治療を受けた (voir Vladimír Křížek, *Kulturgeschichte des Heilbades*, Edition Leipzig, 1990, pp. 160-161, 種村季弘、高木万里子訳『世界温泉文化史』、国分社、1994年参照)。
- 7 二人の娘は最初に物語に登場したとき次のように描かれている。「彼(ゴントラン)は二人は双子ではないかと思って見たりしたが、それほど二人はよく似ていた。それでも、一方のほうがいくらかからだつきがふっくらしており、小柄でもあった。もう一人の方はもっとすらりとして上品だった。二人の髪は、黒いというのではなく、栗色だったが、帯のようにこめかみにぴったりくつつき、頭を軽く動かすたびに、きらりと光った。オーヴェルニュ人らしく顎と額が少しきつすぎ、頬骨が目立ちすぎたが、口許はかわいかった。眼はすばらしく、眉毛は頬の少ないほどはつきりと秀で、肌の色のすがすがしさはすばらしかった」(*Romans*, op. cit., p. 520)。
- 8 *Ibid.*, p. 528.
- 9 *Ibid.*, p. 486.
- 10 *Ibid.*, p. 490.
- 11 *Ibid.*, p. 500.
- 12 *Ibid.*, p. 505.
- 13 温泉保養地での恋愛に関しては、チャーホフの『犬を連れた奥さん』(Anton Tchekhov, *La dame au petit chien et autres nouvelles*, traduction du russe par Madeleine Durand et Édouard Parayre et révisé par Lily Denis, préface de Roger Grenier, Gallimard, Paris, 1999) が有名であろう。ジェーン・オースティンの『説得』(Jane Austen, *Persuasion*, Oxford Bookworms Library, Stage 4, 2006) でも恋

愛の舞台としてバースが登場する。またウラディミール・クリチェクは温泉保養地の情事について、ショーレム・アレイヘムの『マリンエバート』(Sholem Aleichem, *Marienbad*, translated by Aliza Shevrin, Wideview Perigee Books, 1984) 等の作品に見ることができると指摘している (voir *Kulturgeschichte des Heilbades*, op. cit., p. 165)。

14 *Romans*, op. cit., p. 529.

15 *Idem.* クルティエは『水と温泉の文化史』の中で「1800年代のはじめには、浴場は大っぴらな男女の性的交際の場所になった」と指摘している (voir Alev Lytle Croutier, *Taking the waters : spirit, art, sensuality*, Abbeville Press, New York, London, Paris, 1992, p. 112, 訳出にあたっては武者圭子訳『水と温泉の文化史』、三省堂、1996年を参照した)。

16 *Romans*, op. cit., p. 533.

17 *Idem.*

18 *Ibid.*, p. 534.

19 *Ibid.*, p. 531.

20 *Ibid.*, p. 533.

21 *Ibid.*, pp. 587-588.

22 *Ibid.*, p. 588.

23 *Ibid.*, p. 498.

24 *Ibid.*, p. 504.

25 *Ibid.*, pp. 613-614.

26 *Ibid.*, p. 662.

27 *Ibid.*, p. 547.

28 *Ibid.*, p. 677.

29 *Ibid.*, p. 524.

30 *Ibid.*, p. 501.

31 *Ibid.*, p. 508. モーパッサンの作品の中では、しばしば動物は残虐な死をとげる (*Vie de Guy de Maupassant*, op. cit., p. 170)。

32 *Romans*, op. cit., p. 700.